

とっとり県民活動活性化センター情報誌

てとり

vol. **16**
2022.2



特集

それぞれの with コロナ



「いつになったら戻れるだろうか」
経験のない感染症との戦いが始まったところ、
私たちはそれ以前の平穏な暮らしに戻ることを
考えました。それから2年。いまだに感染者数
の増減に気を揉む日が続いていますが、一度存
在したものが無いものにはならないのかもしれ
ません。新型コロナウイルスが存在するこの時
代に、私たちは何を学び、私たちの何が変わっ
たのでしょうか。

オンライン化が進み、働き方やコミュニケー
ションの取り方が変わるなど、社会の仕組みは
大きく変わりました。これまで当たり前だった
ことが当たり前でなくなりました。何が正しく
て、何が誤りなのか。専門家や行政や組織リー
ダーたちでも意見が分かれるほど世の中を揺る
がす事態だからこそ、物事を考える視点や価値



てとり

CONTENTS

特集

2 それぞれの with コロナ



4 座談会「それぞれの with コロナ」

こっちの大山研究所



NPO 法人こども未来ネットワーク



ボランティア団体 MCC



自然がっこう旅をする木



県内の SDGs の取り組み

9 一般社団法人 里山生物多様性プロジェクト ツナガルドボク

高校生 ing

10 ABC プロジェクト ～ AKARI BEER for CHILDREN ～について



それぞれの with コロナ



観は一辺倒ではなく、人それぞれに違うということがわかりました。自分で考えなければいけない責任も増えた気がします。

今回の特集では、「それぞれの with コロナ」と題し、県内の活動団体の方々による座談会を設けました。この二年間、否応なく、自分たちの活動や暮らしを見つめざるを得ない状況を過ごしたそれぞれの気づきや視点を共有しました。そこで出てきたのは、知らず知らずに「新しい生活様式」が当たり前になっていた中で、見失いそうだった大切なことに気づけたという声でした。

平穏な暮らしがまた訪れたとき、それはコロナ前に「戻る」ではありません。今を懸命に生きるからこそ、在るべき姿や進むべき方向が見える。それはコロナ禍を経て、前に「進む」ということではないでしょうか。

《 Z A D A N K A I 》

「それぞれの with コロナ」



県内で活動する4団体の方々に集まっていただき、
コロナ禍で過ごしてきた約2年間を振り返り、
活動や暮らしの中で学んだこと、そして
これからの未来に向けた思いなど語ってもらいました。

「それぞれの with コロナ」と題し、コロナ禍での活動やそこで見えてきたことがあり、と思っています。それぞれの思いを語っていただく前に、自己紹介をお願いします。」

藪田 兵庫県淡路島出身で、最初は地域おこし協力隊として大山町にきました。「こっちの大山研究所」では、様々なアートプロジェクトや、秋には自分たちの住む集落を会場とした芸術祭などを主催しています。個人的には、自宅で月一回泊まれる居酒屋をしたり、シニア向けのタブレット講習会をしたり、ご要望に応えられることをやりながら生きています。

得田 石川出身で、大阪から2011年に移住してきました。倉吉市関金町の福原という10世帯ほどの集落に住んでいて、その休耕田に建てた小屋で自然保育の幼稚園と、小学生を対象にした※オルタナティブスクールを行う「旅をする木」を運営しています。自然の中で子どもたちの主体性を大事にした育ちの場を試行錯誤しながら

らやっています。

楠本 20年以上前から県内の子どものためにできることをやってきました。今は「子ども未来ネットワーク」で、劇団などを呼んで子どもたちにお芝居を見てもらうことをやっています。それとは別に、私自身はボランティアで毎週水曜日に子どもの電話相談を受ける「チャイルドライン」という活動もやっています。昨年度、中高生の自殺が過去最高になってしまつて、コロナがすごく影響しているんじゃないかということもあって、自殺予防の講演会をZOOM研修でやることが増えました。

田中 京都の大学時代に、非行少年の立ち直り支援のボランティア団体に所属したのがきっかけで、鳥取に帰ってきてからもずっとボランティアをしています。3年前から子どもとの成長に繋がることをしようと、出会いを届けることをテーマにした団体「MCC」を代表と一緒に始めました。サンタに

扮してプレゼントを届けたり、松崎駅前でも子ども食堂をやったりしています。もう一つ、「鳥取HAKKA」というダンスコンテストを主催するボランティア団体に所属しています。

活動でも、お住まいの地域でもいいですが、コロナ禍でどんなことが変わりましたか。

得田 保護者さんでも感染症に対する意識は個人個人で違います。こちらとしては、感染対策の基準を作らないといけないけど、「大丈夫でしょう」と思っている人もいれば、「大丈夫じゃない」という人もいます。子どもたちにできるだけ影響を与えずにやりたいと思っているのが、最初は正解がないから本当に試行錯誤しました。

楠本 子どもたちに向けた公演の回数はものすごく減りました。公演団体にはせっかく県外から来てもらうので県内をいくつか回るスケジュールをコーディネートさせても

らっていますが、主催する保育園から相次いでキャンセルの連絡があって…。公演団体に申し訳なく感じましたし、コロナ禍でも子どもたちに何とか生のお芝居を届けたかったので、国の補助金を活用して自主的に2公演を設けました。その際も、本当にやってもいいかどうか、何回も理事会にかけて協議しましたね。



「こっちの大山研究所」

【住 所】鳥取県西伯郡大山町妻木 578-2

【連絡先】080-4026-6017

【webサイト】<https://www.itonamidaisenartfestival.com/>



2013年活動を開始。大山周辺地域を活動拠点に、暮らしの中のアートやデザインの自由で多様な可能性を探求・実践しながら、「おもい」や「こころざし」をともにするひとたちとの繋がりを大切に、誰もが豊かに暮らせる地域社会づくりを目指すクリエイティブチームです。現在は、「イトナミダイセン」というコンセプトのもと、「暮らし」と「アート」の間に境界線をなくし、「イトナミ」そのものをアートする暮らしを実践中。さまざまな分野の垣根を超えたアートプロジェクトを展開しています。

やぶた かな
藪田 佳奈さん

(こっちの大山研究所 副所長)



未来へのための今。ここで終わるわけじゃない。

リアルな場で公演ができなかったことに何か対策を取られましたか？

楠本 リモートで見られるように主催者のところに音響やスクリーンを私たちが設置したり、分身ロボット「OriHime（オリヒメ）」をコンサート会場に持って行って子どもたちに自宅のタブレットで見てもらったり、いろいろやってみました。その他にも、子どもから「コスメシヨップに行ってみよう」とか「鬼太郎列車に乗ってみたい」という希望を聞き、オンラインで画面を通して体験してもらいました。

田中 僕らも、子どもたちに直接関わりたいという思いはなかなか実現できない2年間でした。内部的なことでもリアルなやりとりは減りましたが、以前からZOOM（オンライン会議システム）を使ってミーティングをしていたこともあって、コロナ禍になっても変わらず繋がっていられた部分もありました。活動の中では、子ども食堂もテイクアウト方式にして、子どもたちとは焼きマシユ

マロ作りや巨大シャボン玉のように、屋外でできることをしました。感染状況をみながらやっています。

藪田 私たちの活動は、来年度で10年目になります。コロナ禍になって「これは本当に自分たちがやりたいことか」という自分たちの本気度を話し合う良いきっかけになり、やる内容も濃くなりました。毎年、秋に行う芸術祭も、最初の年は3日間、次は1週間でやって、コロナ禍になった3年目はあえて2週間に伸ばしました。「この数日に行かなきゃ」と集中していた人が分散し、ゆとりが生まれ、完全予約制にしたことで見に来てくれる人のエネルギーが変わりました。拠点となる長田集落は、140人くらいが住んでいるのですが、イベントを開くことで地域の人たちが不安にならないか、集落の人とのコミュニケーションをよりたくさん取れることは意識しました。コロナ禍があり、何が一番大事なことが気づくきっかけになりました。

見直す機会になったという話も出ましたが、コロナを通して気づいたこと、学んだことはありましたか。

得田 オンラインも使ってみて気づいたことは、僕らが目指していく未来はこれじゃないなということ。子どもも大人も肌で感じるものがあって、これまでやってきたそのスタイルでやり続けるにはどうしたらいいかを考えました。子どもって大人の影響を一番受けます。例えば、泥遊びでもお母さんが「汚い」と言えば汚いと思うし、「ぬるぬるするね」と言えば「ぬるぬるするね」と面白がる。だから、団体のメンバーには、子どもたちを心配するより、大人がきちんと繋がっていたいねと話しました。「僕らが決めたからこうしてください」じゃなくて、不安だという声があればもう一度話し、最終的に「みんなが安心できる場を作ること」が僕らにとってのコロナ対策でした。

楠本 新たな方法に気づけたことが大きいと思います。子どもたちに実際に見てもらえる

できないことばかりに目をやるのではなく、そこはチャンスだと思っています。

くすもと ち え み
楠本 知恵美 さん
(NPO法人こども未来ネットワーク 副理事長)



「NPO法人こども未来ネットワーク」

【住 所】鳥取県倉吉市越中町 1583-1

【連絡先】0858-22-1960 【FAX】0858-27-0271

【メール】kodomo@treaming.net 【Webサイト】http://kodomomirai.kirara.st/

【営業日】月曜日～金曜日の10:00～15:00(土日祝日休み)



子どもたちの体験活動や社会参画の機会の拡充を図るとともにそれを支える基盤作りをすすめていくことで子どもの豊かな成長に寄与することを目的とし、行政や企業では行えないNPOならではの先駆的かつ専門性を有する事業に継続的に取り組んでいます。

主に「アートスタート事業」、「メディアスタート事業」、「トイスタート事業」などを展開しています。

実際に吹いて臨場感を感じてもらう仕掛けなど、ただ配信するだけではありません。でも、やはりリアルにはリアルにしかないこともあって、リアルで見る喜びを知っているから、このままでいいとは思えないですが…。

藪田 今年度の藝術祭では、ライブとオンライン配信を併用したイベントも開催しました。リアル参加はもちろん最高に楽しいですが、人が大勢いるところが不得意という人もいて、そういう人もオンラインなら、自分が安心できる場所から参加できたり、また、オンライン配信はその瞬間参加できない方のために、一定期間見れる形がとれるので、距離も時間も関係なく参加できるのも良いと思います。また、オンライン配信の方法も、定点カメラの映像を見るイメージだったのですが、今年度の藝術祭で配信をお願いしたチームは、カメラを持って会場内を色々な角度から撮影してくれ、リアルでは見れない部分を見せてくれたりと、オンラインならではの良さがあり喜んでもらえました。

なので、リアルとオンラインの両方の選択肢ができたことは良いことだと思っています。

ここまでコロナ禍でも活動を続けるためのアイデアや工夫などをお聞きできたのですが、懸念していることや新たにできてきている課題はありますか。

得田 スタッフがもつというところ、飛び出して、学んだりがほしいけどパツと遠出ができない。オンラインの研修もあるけど、僕はどこまで行っても直接会って、その人の空気感みたいなものがわからないと腹落ちしないタイプ。コロナ禍の状況が当たり前になっちゃって、研修も全部オンラインでいいじゃん、となる流れが怖いですね。僕はもともと「旅をする木」と名前をつけているくらい、旅が好き。旅の中にこそいろんな発見があって、思いも寄らないものを受け入れる経験があるんですね。それって画面の中でなく、一歩外に出ないと起こらないことなんです。

藪田 私は小学校の学習支援にも行っているんですが、先日もスキー合宿が初めは延期、最終的には中止になりました。子どもたちは期待しては落胆の繰り返しになっていく。落胆をプラスに変えてくれるイベントがあればいいのですが…。どうせ中止になるんでしょとか、よく聞くので、ポジティブに切り替えられる仕掛けがあれば良いと思います。

田中 僕もダンスコンテストを直前に中止した立場なので、その点はすごく複雑です。この年が最後というチームもあったかもしれないし、子どもたちの気持ちの持って行き場がどうなるかが心配です。それは企画する方の大人も同じだと思います。中止、中止でモチベーションを維持するのが難しい。でも、コロナ禍で今年はやめようとなると、次に作る時にすごくエネルギーが必要になってくる気がします。それに、本番だけが全てじゃないし、準備の過程も大事なことに捉えてもらえたらと思います。

藪田 私は、剣道をしているん

たなか ゆうき
田中 祐貴 さん
(ボランティア団体MCC 事務局長)



「ボランティア団体 MCC」

【住 所】鳥取県湯梨浜町旭 412-1 (とんかつ専門店「とん吉」内)

【連絡先】0858-32-1000 【メール】mcc.volunteer.2019@gmail.com

【団体インスタグラム】<https://www.instagram.com/meecount.creators.club/>

【活動日】毎週火曜オンライン定期ミーティング



“子どもの成長に寄与したい。そのために「子どもに会いを！」をテーマに活動する。”これが MCC の設立時から今も変わらない想いです。「出会い」は学びや気づきをもたらし、子どもの可能性を広げたり引き出したりします。様々なボランティアスタッフが力を合わせ、鳥取県中部を拠点に、新しい出会いを創造します。

今はできる手段でどれだけつながりを持てるかが大事だと思います。

く、本来は何事もそうだと
思う。きちんと責任感と意識を
持った人たちが対策をして集
まる、それが安心安全の場なん
だと分かった体験でした。

**みなさんにとってコロナ禍
とはどういうもので、これか
らの未来をどう考えますか。**

楠本 悪いことばかりでなく、
良い点もあります。オンライン
での研修ができる機会が増え
ているので、本当は東京に行か
ないと取れないおもちゃコー
ディネーターの資格を取るこ
とができました。できないこと
ばかりに目をやるのではなく、
そこはチャンスだなと思って
います。この先、コロナ禍が過
ぎた後のことも私自身はあま
り迷っていません。一人でも多
くの子どもたちに届けられる
よう、配信でも見られるサービ
スはしたいと思っています。そ
ういう手段が増えたのも、コロ
ナ禍があったからだと思いま
す。

田中 いろんな制約がまだま
だ続きそうだなと思って、そ
の間に根を張ることを意識し

ています。これは個人的にも
やりたかったことですが、中
部で活躍する同世代を繋げて
いきたいと思っていて、オンラ
インでゲスト2人くらい来て
もらってクロストークをする
ことを始めました。最終的には
リアルで会ってということに
したいけど、今はできる手段で
どれだけ繋がりを持てるかが
大事だと思います。その人たち
とお互いの活動を協力し合え、
共感の輪が広がっていくと、点
と点が面になってくる。そこか
ら新しいものが見えてきたら
いいなと思っています。

得田 最近もスタッフミ
ティングで県外研修を延期に
決めました。今日の話を聞いて
思ったのが、一番の目的がス
タッフに学んでほしいという
ことであれば、学びの種類は変
わるけど、学びたいということ
は止めなくていいと思いまし
た。これは子ども遊びと似て
いる。例えば、子どもたちがや
りたいということが少し危な
いことだったとしたら、できる
範囲のところで違うやり方を
一緒に考えてみるんですね。そ
こでダメと言わず、子どもの

やってみたいという気持ちは
ものすごいエネルギーで、その
火をどうやって消さないよう
にするかを常に考えています。
コロナ禍でも同じなんだなと
やり方は違っても、ちゃんと僕
らは進めているよね、という実
感が大事だと思います。

藪田

コロナにはいろんなこ
と気づかせてもらいました。終
わりというのがあるのかもわ
からないけど、そもそも大切な
ものを忘れずにいきたい。止
まっているように見えている
けど、そこまで話し合ったこと
ややってきたことは無駄にな
っていないし、熱量をかけた
決断は悪いものでは絶対にな
いと信じている。未来へのため
の今。ここで終わるわけじゃな
い、と今日も気づかせてもらっ
た。

得田 最後に、一言。コロナ禍
で気づいたこととして、いつど
んな状況になるか、明日がわか
らないというのが世の中。だと
したら、やっぱり自分がワクワク
することをしたい。コロナが
落ち着いてからやろうと思っ
ていると、できなくなるという

とくだ まさる
得田 優さん
(自然がっこう旅をする木 代表)

子どもたちに「今を生きてほしい」と思っているように、
大人の僕らも今を生きたいと思いました。



「自然がっこう 旅をする木」

【住 所】鳥取県倉吉市関金町福原

【連絡先】090-5963-1078 (16:00 ~ 19:00)

【メール】bridge.tottori@gmail.com 【Webサイト】<https://tabiosuruki.com/about>

【開校日】月曜日～金曜日(土日祝休み 長期休み有り)

2015年4月倉吉市関金町福原集落にて、“自然”と“暮らし”をテーマにした小さな学び舎「自然がっこう 旅をする木」を設立。自然保育のようちえんは7年目、自由な学び舎(小学生対象のオルタナティブスクール)は3年目を迎えました。他にも子育て支援活動やキャンプ事業も行っています。

とっとりSDGsプラットフォーム
TOTTORI SDGs PLATFORM

<https://sdgsnwt.jimdofree.com/>

會員隨時募集中!

県内の
SDGsの
取り組み

当センターは、SDGsに取り組む個人、団体等の情報交換・発信の場となる、「とっとりSDGsプラットフォーム」の事務局として、SDGsの推進を行っています。今回はプラットフォームのメンバーのなかから、2団体をご紹介します。

ツナガルドボク

- 住所：鳥取県鳥取市湖山町南4丁目101
鳥取大学地域価値創造研究教育機構内
- HP：<https://tunadobo-c.com/>
- 連絡先：info@tunadobo-c.com



ツナガルドボクは、地方土木業界の活性化と若者の居場所づくりによる地域創生を目標に活動している学生団体です。2018年の12月から鳥取大学を拠点に活動を開始しました。活動内容は、建設系企業と学生の日常的な交流を生み出すことや学生のさまざまな挑戦を促進することなどを目的としたイベントやプロジェクトの実施です。

これまで行ってきたのは、土木の魅力発信、土木の現場見学、学生のキャリア形成、業界研究などです。これらはSDGsの17の目標のうち4番目の「質の高い教育をみんなに」や8番目の「働きがいも経済成長も」の2つに深く関係するものです。

2021年11月と12月には、「建設業界の先輩に聞いてみた」ということで、建設業界で働くことの魅力や仕事のやりがいなど、先輩の本音を聞けるイベントを開催しました。イベントの参加者からは「自分が将来希望する業界がどのような業界なのか理解できた」、「大学の講義では聞くことができない貴重なお話が聞けた」などの声が寄せられました。

これまでもさまざまなイベントを実施してきましたが、そのほとんどが大学の講義では学べない内容のものや建設業界の働きがいや多様な切り口から伝えるものです。今後も多くの学生に質の高い学びや働きがいを伝えられたいと思っています。



国土交通省女性職員に質問する学生たち

一般社団法人
里山生物多様性プロジェクト

- 住 所:鳥取県西伯郡南部町鶴田461
日本インテライツ内
- H P:<https://satoyamabp.org/top/>
- 連絡先:info@interight.co.jp



私たちは南部町で荒地となった水田の草木を刈り、水を張って野生動植物の調査体験ができる体験会場を作っています。体験会の収益で環境保全を行う、持続可能な保全の仕組み作りに挑戦しています。

SDGsの広まりをチャンスと捉えて2019年12月に活動を始めました。南部町と鳥取県には野生動植物に関する4つの社会課題があります。一つ目は、野生動植物の環境保全を行う後継者が不足していること。二つ目は、荒廃した田畑や山林が増えていること。二次的自然の遷移が進むと共に、先人が築いた里地・里山の資産価値が失われること。三つ目は、行政機関と希少動植物の保全に関する調整が困難であること、四つ目は、環境保全に関心の高い若者がいる一方で、専門性を生かした就職の受け皿となる企業・団体が少ないことです。

私たちはSDGsの発想を使って4つの課題を結び付けてまとめて解決しようと考えました。4つの課題はSDGsに含まれます。8番目「働きがいも経済成長も」、12番目「つくる責任　つかう責任」、15番目「陸の豊かさを守ろう」、が挙げられます。

私たちは令和4年から野生動植物の環境保全を感じるツアーを本格的に始めます。地域の大学生がここで働きたいと思う地域を創っていきます。



ビオトープの稲を移植する作業の様子（令和2年10月）



ピオトーナで生き物調査
体験会（令和3年1月）



zoomで生き物観察会の様子
スマホで撮影した動画を配信
(令和3年3月)



現在進行形の高校生の動きを紹介する

高校生ing

ABCプロジェクト/ ～AKARI BEER for CHILDREN～ について

鳥取城北高等学校 アントレプレナー部

※「AKARI BEER for CHILDREN」は、令和3年度とっとりSDGs推進補助金
(若者団体活動支援型)の採択事業です。



アン
トレ
プレ
ナー
部
2
年
の
清
水
千
紬
さ
ん、
橋
本
栞
さ
ん
に
聞
い
て
み
ま
し
た
!



はしもと しおり
橋本 栞さん

しみず ちひろ
清水 千紬さん

やれば意外と何でもできる。
チャレンジしてみることに
価値があると思うように
なりました。



プロジェクトを通して、
自分も世界の問題に
関われるんだと
実感しました。



Q1 「アントレプレナー部」ってなんですか？

清水さん：アントレプレナーというのは「起業家」という
意味があります。「鳥取に興奮と熱狂を！」をモットー
に、「モノ」や「コト」づくりをしています。地域の困りご
とをデザインを通して解決する取り組みをしていた地
域デザイン部と、レーザー加工や 3D プリンター等
ものづくりをしていたファ部が合併してできた部です。

橋本さん：現在は「山陰三ツ星マーケット」というイベ
ントへ出店するために、みんなでレジンのアクセサリ
や小物を作って販売する準備をしています。

清水さん：また、VR技術を使って、自分達が描いた月
面都市をお客さんに見てもらおうような取り組みも進め
ています。

Q3 ABCプロジェクトをしてみてどうでしたか？

橋本さん：みんなでいくつも案を出し、100種類以上のデザインを作りました。そのうち採用されたのは2つです。

清水さん：ひとつは先輩が、もうひとつは私がデザインしました。これまで世界の課題や問題に興味があって個人的に
調べていたのですが、自分にできることはあるのだろうかと思ひながら過ごしていました。でもこのプロジェクトを通し
て、自分も世界の問題に関われるんだと実感しました。

橋本さん：私も授業で世界に貧困問題があることを知りました。日本では「貧困」は考えられないけど、世界に目を向け
ると、色々な状況にある人や困っている人がいることに気づきました。自分に何かできることがあるかな、と考えてこの
プロジェクトにつながりました。プロジェクトが終わった後、物資が届いた報告と現地の写真を見せてもらいました。自
分達の行動が、世界の人たちと関わって、こうして実際に現地に物資が届いたんだと思うと、嬉しさとなんだか不思議
な感じがしました。

Q2 ABCプロジェクトについて教えてください。

橋本さん：アントレプレナー部の前身の地域デザイン部
だった時に、たまだ屋さんというおせんべい屋さんとか
ラボして、部でパッケージをデザインしました。その時の
商品を見てくれた AKARI BREWING さんから、ビールラ
ベルをデザインしてほしいと声をかけていただきました。

清水さん：ちょうど授業でSDGsを学んで、世界には困
っている子どもたちがたくさんいることを知りました。自分
達にできることがないかと考え、プロジェクトを立ち上
げて、インドの子どもたちの教育支援をしているイッポ
ラボ合同会社さんを通して、自分達がデザインしたラ
ベルのビールが売れたら、売り上げの一部を寄付して、イ
ンドの子どもたちの教科書や教材費に使ってもらおうこ
とにしました。ただ新型コロナの感染拡大でインドでは命
に関わるような大変な生活状況になっていると聞いた
ので、教育ではなく生活資材の支援に変更しました。

Q4 プロジェクトを終えて、自分が変わったな と感じることはありますか？

清水さん：これまでは自分の周りのことに目がいき
がちでした。でもプロジェクトで世界に関わった実感を
持ったことで、今はニュースで世界の現状を見ても、
身近に感じられるようになりました。

橋本さん：実際に自分達が行動を起こして、インドの人
達の助けになったことで、高校生の私たちでもでき
ることがある、関われることがあるんだと感じました。
また、やれば意外と何でもできる、チャレンジするこ
とに価値があると思うようになりました。また次も
何かやってみたいと思ってます。



編集 後記

学校が全国一斉臨時休業となった2年前、
ここまでマスク着用の生活が続くと、どれ
だけの人が予想していただろう。
コロナ禍により、新たな気づきがあり、その
中から新たなアイデアも生まれている。
私たちは、したたかに、しなやかに、活動を
続けていく。これからも。

小林綾子



「てとり」はとっとり県民活動活性化センターの愛称です。

発行：公益財団法人 とっとり県民活動活性化センター

発行人／毛利 葉

編集人／小林 綾子

取材・編集／藤田 和俊（合同会社僕ら）、寺坂 純子、椿 善裕、池淵 菜美、谷 祐基、世瀬 あけみ、尾崎 可愛、入江 一彦、上山 梓

写真／藤田 和俊（合同会社僕ら）

写真提供／イトナミダイセン、ボランティア団体MCC、NPO法人こども未来ネットワーク、自然がっこう旅をする木、

一般社団法人里山生物多様性プロジェクト、ツナガルドボク

協力／一般社団法人里山生物多様性プロジェクト、ツナガルドボク

デザイン／東京印刷株式会社



読者アンケートに
ご協力ください。



「てとり」
バックナンバー
はこちらから。

お問合せ：公益財団法人 とっとり県民活動活性化センター URL <http://tottori-katsu.net/>

〒682-0023 鳥取県倉吉市山根 557-1 パープルタウン 2 階 TEL 0858-24-6460 FAX 0858-24-6470

E-mail info@tottori-katsu.net